

『正法眼蔵随聞記』は、道元さまの弟子である懷^{えいしょう}^{どうげん}^{しょうぼう}^{ぶっぼう}^{しんすい}^{どうげん} 葬さまが書かれたといわれる書物です。「正^{しょうぼう}法」とは「仏法の真髓」を指します。道元さまが説かれた「仏法の真髓」を、懷^{えいしょう}葬さまが聞^きくに随^{したが}って記した（随聞記）ということですので、道元さまが伝えた教^{しつろく}えを聞きに集まった人びとに示された言葉を、懷^{えいしょう}葬さまが聞^きいて筆録し、まとめたものです。

『正法眼蔵随聞記』には、お釈迦さまの説^{ほとけ}かれた^{ぶつどう} 仏の道「仏道」を学^{がくどう}ぶ者「学道の人」が在^あるべき姿や生き方が示されています。

「仏道」を学^{じっせん}び生きる実践をしている「学道の人」にとっては、道元さまからの修行の実践の言葉として間違いなく有り難い書物です。しかし、ただの仏教の知識としてしか見ない人には、さまざまな勘違^{かんちがひ}いをさせてしまう書物なのかも知れません。

私たちは、何が必要で何が必要でないかを取捨^{しゅしゃせんたく}選^{せん}択^{たく}して生きています。いくら金銀財宝を提供されても、必要の無い人にとっては当に「猫に小判」であって、小判に価値を感じないでしょう。同じように、「宗教」も必要と感^{かん}じない人には「猫に小判」なのです。しかし、小判に直接価値を見出せなくとも、他の多くの人^{ひと}が小判の価値を認め、必要としています。いくら自分だけが小判を必要としていなくても必要としている他の多くの人たちとはつながっているわけです。小判が周りに影響力もたらし、その影響力は自分にまで及びます。それがつまり「縁」です。

「小判」も「宗教」も私たち自身が価値を決めることに違いはありません。しかし、私たちの心^{こころ}がその価値を決める前と後でも、そのもの自体は変わらないのです。私たちの心^{こころ}が介在するので、価値が変わってややこしくなるのです。

私たちは一人一人違う存在です。私たちの心も一人一人違います。ややこしさは、人が多^{おほい}いだけややこしくなるのです。

この当たり前で一見複雑に思えるようなことも、「縁」という「真実」に照らし合わせていけば、段々と理解できるようになるのです。

この「縁」について学^{まな}ぶのが「仏道」なのです。この見方をすると、「仏道」は「宗教」というよりは「真実を生きる道」といえます。「縁」という「真実」を信じ、「縁」の中で生きる姿勢が大切なのです。

『正法眼蔵随聞記』とは、そのような複雑な「縁」の中で「仏道」を学び生きる「学道の人」にとっての価値ある入門書なのです。

— 終 —